

## 原仙作と『英文標準問題精講』のこと

中村雅之

### 1. はじめに

原仙作『英文標準問題精講』（旺文社）は、1933年の初版以来いくたびもの改訂増補を経て、2025年の今なお現役の受験英語参考書として書店に並んでいる。もっとも、今は受験生よりも、昭和生まれの中高生が主な購買層である。現在の入試英語は人生訓や伝記などよりも新聞・雑誌・広告などの文章が中心であり、『英文標準問題精講』を受験対策本として選ぶ理由はない。本書は受験参考書でありながら、19世紀～20世紀前半の小説・伝記・随筆の名文選という側面を持つ。深みのある英文を読むことに再挑戦したい人たちにとっては、懐かしくもあり、また容易には完遂できない、あこがれの書なのである。

小文は、原仙作という英語愛好家について、そして1世紀近くを生き抜いてきた名文選集『英文標準問題精講』について粗描する。

### 2. 原仙作略伝<sup>1</sup>

1908（明治41）年9月14日 長崎県諫早市に生まれる。生地は島原鉄道小野駅から1里ほど離れた住家20軒にも満たない山里。<sup>2</sup>

1921？ 旧制の海星中学校に入学。<sup>3</sup> その2年生の頃、英語の音読を始める。母はよく勉強するとよろこび、父はうるさがった。<sup>4</sup>

1927？ 旧制の官立長崎高等商業学校に入学。原の在校当時、英語は週10時間、第二外国語は週3時間あり、第二外国語には中・独・露・仏・蘭・西・マレー語があった。<sup>5</sup> 原は英語部に所属。<sup>6</sup>

<sup>1</sup> 以下の基本的な履歴は①『著作権台帳-文化人名録-(7版)昭和33年版』1128頁、②『英文標準問題精講』の著者紹介。③佐藤晴雄(2012)「武蔵野英文学会 講演会記録その他」【注11参照】218頁による。③が最も詳しい。他の情報源はいちいち注記する。

<sup>2</sup> 原仙作の弟で画家の覚が母校である海星中学校の『100周年記念誌』に回顧録を書いており、学校法人海星学園のウェブサイトのブログにその文章が一部分引用されている。いま、そのブログによる。以下参照。

<https://kaisei-ngs.ed.jp/news-and-topics/kaisei-gakuen-dayori/58123/>

<sup>3</sup> 海星中学校は長崎市にあるフランス系のミッションスクール。

<sup>4</sup> 注2参照。

<sup>5</sup> 松本陸樹・大石恵(2006)「旧制長崎高等商業学校における教育と成果—明治・大正期を中心として—」『経営と経済』85巻・3・4号。245頁の表1「長崎高商のカリキュラムと毎週授業時数」と249頁の表4「長崎高商における第二外国語の選択肢の変化」による。

<sup>6</sup> 注2の覚の回想録に、1929（昭和4）年に長崎高商主催の英語弁論大会があり、高商英語部のリーダーだった仙作が最後のスピーチをしたとある。この時のことは『英語青年』62巻8号（1930年1月15日発行）の「片々録」のコーナーに次のように紹介されている（297頁）。

長崎に於る英語演説大會 長崎高商主催第二回全國大學高等專門學校英語演説大會は、【1929年】十一月三十日午後七時より同校講堂に於いて開催、バートン教授の流暢な開會の辭に初り、豫定のプログラムを無事終了した。参加者は東京商大、大谷大學、大倉高商、西南學院、山口高商、大分高商、大阪高商、神戸商大、長崎高商、山口高商、關西學院等の諸校で、サア・クライダー・マリオット審判の下に一等長崎高商、二等關西學院、二等東京商大、三等大倉高商、四等山口高商と決し優勝銀製カップは長崎高商の原仙作氏の手に歸した。

また、長崎高商の後輩が『長崎高等商業学校・長崎大学経済学部70年史』（瓊林会発行、1975）に当時

1928（昭和3）年6月？ 『上級英語』（研究社）に Francis Gubble, *The Secret Society* の訳注を掲載。<sup>7</sup> 当時、原は19歳で長崎高商在学中。

1929（昭和4）年4月1日 『上級英語』（研究社）に「The Siege of the Round House」の訳注を掲載。7月まで3回連載。<sup>8</sup> これは Robert Louis Stevenson, *Kidnapped* の第10章「The Siege of the Round House」の訳注。当時、原は20歳で長崎高商在学中。

1929（昭和4）年8月？ 『上級英語』（研究社）に Fitz-James O'Brien, *What was It? A Mystery* の訳注を掲載。<sup>9</sup> 当時、原は20歳で長崎高商在学中。

1930（昭和5）年10月 『受験と学生』（研究社）13巻11号に「本年度全国高専英語入試問題の出典探し」を掲載。<sup>10</sup> 当時、原は22歳で長崎高商最終学年。

1931（昭和6）年3月 長崎高商を卒業。直後に朝鮮京城（現ソウル）の龍山公立中学校の英語教諭となり、終戦まで勤める。教師による体罰が日常だった当時、原だけは体罰を行わなかった。<sup>11</sup> また、この年に欧文社（のち旺文社）を設立した赤尾好夫から英語参考書の作成を依頼される。<sup>12</sup>

1933（昭和8）年9月1日 欧文社から旧制高校受験用として『英文標準問題精講』を出版。この時、原は24歳。<sup>13</sup>

1945（昭和20）年9-12月 終戦後の京城において米軍政長官付通訳官兼参謀二課翻訳官。<sup>14</sup>

1946（昭和21）年5月 内地に引揚げ。同年、旺文社ユース・コンパニオン主幹、1948（昭和23）年

---

のクラブ活動について記した中に、「…語学部は伊東勇太郎先生、バードン先生、原仙作先輩の指導をうけ、バードン先生の自宅に行って、バードン婦人の発音練習…」(117頁)とあり、語学部（＝英語部）では原が指導役であったことが分かる。【バードンはバートンの誤か？】

<sup>7</sup> 『英語青年』59巻7号（1928）の「新聞雑誌英学一覧」（252頁）による。

<sup>8</sup> 田鍋幸信編著（1974）『日本におけるスティーヴンスン書誌』朝日出版社。66頁参照。

<sup>9</sup> 『英語青年』61巻11号（1929）の「新聞雑誌英学一覧」（407頁）による。

<sup>10</sup> 国立国会図書館デジタルコレクションの検索結果による。他の年も同種の掲載あり。

<sup>11</sup> 終戦の前年に龍山中学に入学した作家の富島健夫のエッセー集『生命の山河』（光風社出版、1981）の中に「体罰と制裁と」という文章がある。ある日、自身が数学教師にひどい体罰を受けたことに関連して、次のように記している。

「ぜったいに生徒をなぐらないのは、ハラセンぐらいのものだろう」

そんなことばをよく聞かされた。ハラセンこと原仙作は英語の名教師で、生徒が挙手の礼をすると、人さし指を一本だけ立てて答礼するくせがあった。上学年を教えていて、ぼくたちは習ったことがない。

「ハラセンにはスパイの嫌疑もかかっているんだ」

そんなうわさも耳にした。軍国調一色の当時である。ちょっと自由主義的な傾向があると、すぐにスパイにされてしまう。ハラセンは英語の名教師だからなおさらである。

<sup>12</sup> 1971年版『英文標準問題精講』の「改訂新版の序」に、次のようにある。

旺文社が創業40年を迎えた。昭和6年といえ、赤尾社長も白面の青年であり、私も京城の龍山公立中学校の英語教師になったばかりの青二才であった。そのとき赤尾氏の依頼によって2年ばかりで書き上げたのが本書の初版であった。

<sup>13</sup> ウィキペディア（Wikipedia）などに『英文標準問題精講』を原仙作25歳の時の著作とするが、厳密には出版当時まだ満25歳の誕生日を迎えてはいない。原は1908年9月14日生まれ、著作は1933年9月1日発行である。

<sup>14</sup> 佐藤晴雄（2012）「武蔵野英文学会 講演会記録その他」『武蔵野英米文学』44号。その1972年の項の原仙作の略歴（218頁）による。一方、片山寛・原仙作『英語の傾向と対策（31年版）』（旺文社、1955）の著者紹介（2頁）によれば、「終戦時米廿四軍在鮮日本人代表通訳官、兼参謀二課翻訳官」とある。

同社の参与になり<sup>15</sup>、1959（昭和 34）年に同社の顧問になる。

1950-1956（昭和 25-31）年 開成高等学校講師。

1956（昭和 31）年以降、千葉大学工業短期大学部、明治大学、青山学院大学、実践女子短大で非常勤講師を歴任。

1973（昭和 48）年 武蔵野女子大学短期大学部教授に就任。

1974（昭和 49）年 7 月 9 日 没（65 歳）。

#### 主な著作

- ・『英文標準問題精講』（欧文社、1933）
- ・『和英標準問題精講』（欧文社、1937）
- ・『新制中学英和辞典』（有恒社、1948）
- ・『米英新語辞典』（旺文社、1949）
- ・『野球英語辞典』（芙蓉出版社、1949）
- ・『二十世紀英米名文選 1-4』（北星堂、1952-1965）
- ・『十九世紀英米名文選』（北星堂、1953）
- ・『英文法標準問題精講』（旺文社、1966）
- ・『Exercises in Translating Japanese Literature-日本文学英訳演習-』（北星堂、1969）

#### 3. 『英文標準問題精講』の改訂版

超ロングセラーである『英文標準問題精講』は何度も改訂されている。構成の変更や英文の入れ替えは少なくとも 7 回以上あり、そのほかに微細な修正や追記が何度もある。各種のバージョンは奥付と序文タイトルの情報が錯綜していて、どれが何度目の改訂版なのかすぐには判断できない。以下に主なバージョンを列挙する。③以降は中村の手元にあるものである。①と②の実物は未見であり、いくつかのブログやネットオークションの画像、あるいは古い広告の情報によった。「改訂版」「3 訂版」などは奥付に記された情報であり、カッコ内が序文のタイトルである。なお、初版の奥付には発行年の情報がなく、1971 年版に「昭和 8 年 9 月 1 日 初版発行」とある（1982 年版以降は「1933 年 9 月 1 日」と表記）。

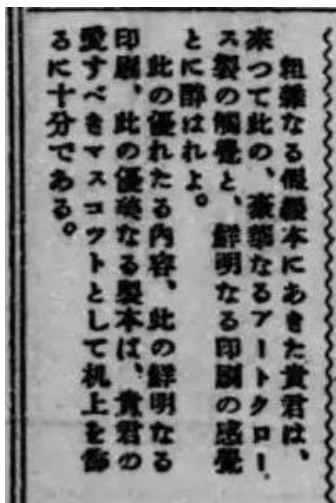
- ① 【1933（昭和 8）年 初版】（緒言）
- ② 1948（昭和 23）年 改訂版（緒言／改訂版上梓に際して）
- ③ 1954（昭和 29）年 改訂版（緒言／再訂版の序）
- ④ 1962（昭和 37）年 改訂版（はしがき／改訂新版の序）
- ⑤ 1971（昭和 46）年 3 訂版（はしがき／改訂新版の序）
- ⑥ 1982（昭和 57）年 4 訂版（はしがき／第四訂版の序）
- ⑦ 1991（平成 3）年 5 訂版（はしがき／第五訂版の序）
- ⑧ 1999（平成 11）年 新装 5 訂版（はしがき／新装改訂版の序）

---

<sup>15</sup> 片山寛・原仙作『英語の傾向と対策（31 年版）』（旺文社、1955）の著者紹介（2 頁）による。なお、「ユース・コンパニオン」は『The Youth's Companion』という旺文社の英語学習雑誌。原は海外の新聞記事などを語注・和訳付きで紹介する「World News」というコーナーを担当したほか、作家紹介を伴った入試予想問題や論説文の訳注など多くの記事を寄稿した。



(図 3)



(図 4)

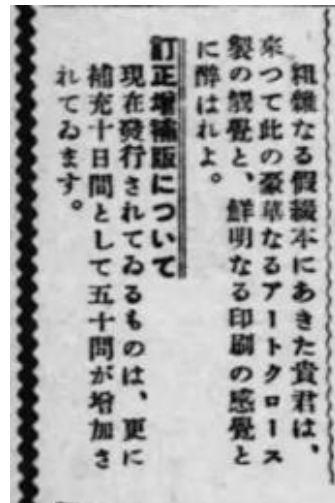


図 3、図 4 を見ると、「粗雑なる假綴本にあきた貴君は、來つて此の豪華なるアートクロス製の觸覺と、鮮明なる印刷の感覺とに酔はれよ。」は同じであるが、それに続く部分が異なる。図 4 の 1936 年の広告では「訂正増補版について」として、「現在發行されてゐるものは、更に補充十日間として五十問が増加されてゐます。」とある。つまり、この広告が載った 1936（昭和 11）年 4 月 1 日の段階ですでに英文 50 問が追加された「訂正増補版」なるものが出ていたことになる。手元にある「昭和 29 年改訂版發行、昭和 37 年 1 月 20 日重版發行」版を見ると、「第一編初期十日間、第二編中期十日間、第三編最終十日間、第四編練習問題編」として各 50 問、全 200 問という構成になっている。この第四編が「補充十日間」を受け継いだ部分なのであろう。なお、現行本は「第Ⅰ編初期 10 日間、第Ⅱ編中期 10 日間、第Ⅲ編後期 10 日間」のそれぞれに練習問題も振り分けて、全 220 問である。

要するに、本書が何度改訂されたか、換言すれば、何種類のテキストが存在するかについては、初版が發行された 1933 年から一時絶版になる 1942 年までの全ての版を見なければ正確なことは分からない。1942（昭和 17）年に「欧文社」は「旺文社」と社名を変更する。これは英語を敵性語とする当時の世相を反映したもので、英米の自由主義的な内容の文章を含む『英文標準問題精講』も絶版に追い込まれる。1948 年版の「改訂版上梓に際して」には「昭和十七年絶版を余儀なくされるまでに百数十版を重ねた」とある。この「百数十版」は、改訂や増補を経たものと、単なる増刷の両方を含むのであろう。

なお、1971（昭和 46）年版の序文の後には、次のような告知がある。

本書には、読者の要望に応じて著者自らの声で、この参考書の内容をテープに吹き込んだ「カセットスタディ 英文標準問題精講」があります。「カセットスタディ」は参考書をテキストにして、重要点やわかりにくい点、誤りやすい点などを、目と耳による立体的な解説で、より深く、よりわかりやすく指導してあります。

この時、原は 62 歳。カセットテープは著者晩年の音声吹き込まれたものである。

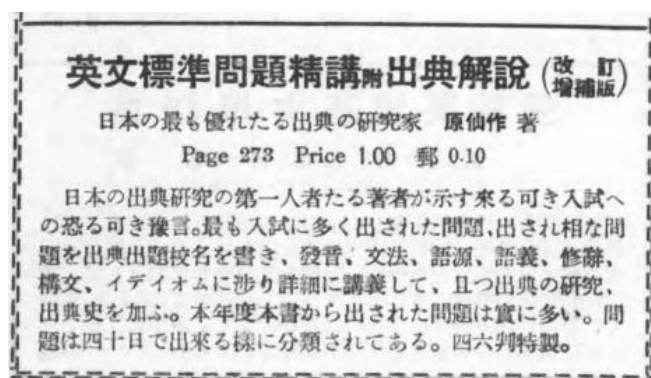
#### 4. 出典研究の第一人者

戦前から昭和の終り頃まで『英文標準問題精講』が絶大な人気を博したのは、収録された文章が何度も入試に出題されたこと、そして文章の全てに出典が明記されていたことによる。前掲の広告には「原仙作先生著 英文標準問題精講 付出典解説」とあり、初期の『英文標準問題精講』には「出典解説」が付き

れていたことがわかる。

戦前の欧文社（旺文社）の書籍の巻末に掲載された広告には一貫して「出典研究の第一人者」という文句が見られる。下の図5は高津巖『簡明代数学』（欧文社、1938）の巻末の広告である。「日本の出典研究の第一人者たる著者が示す来る可き入試への恐る可き豫言」とあるのは些か大げさな響きがあるが、実際に原の予想問題はよく当たったようである。前掲の図1と図2の広告の中にやや具体的な内容が記されている。（図6に部分拡大して再掲）

（図5）



（図6）



後半部分に、「原先生執筆物の眞價は從來受験句報、受験と學生、上級英語等に載せた豫想問題が三〇%以上も翌年の入試問題に出されるのを見ても解る。」とある。つまり、本書の出版以前から『受験句報』『受験と學生』『上級英語』などの雑誌<sup>17</sup>に入試の予想問題を載せていて、それがよく当たったということである。長崎高商時代から入試問題の出典に関心のあったことは、「2. 原仙作略伝」の1930年の項に

<sup>17</sup> 『受験句報』（後の『蛍雪時代』）は旺文社、『受験と學生』、『上級英語』はともに研究社から出版されていた雑誌。



示した「本年度全国高専英語入試問題の出典探し」などにより確認できる。長崎高商在学中から、原はすでに入試英語のエキスパートと見なされていた訳である。1931年に中学教師になったばかりの原に対して、旺文社を興した赤尾好夫が受験英語の参考書作成を依頼したのは、そのような理由からであった。

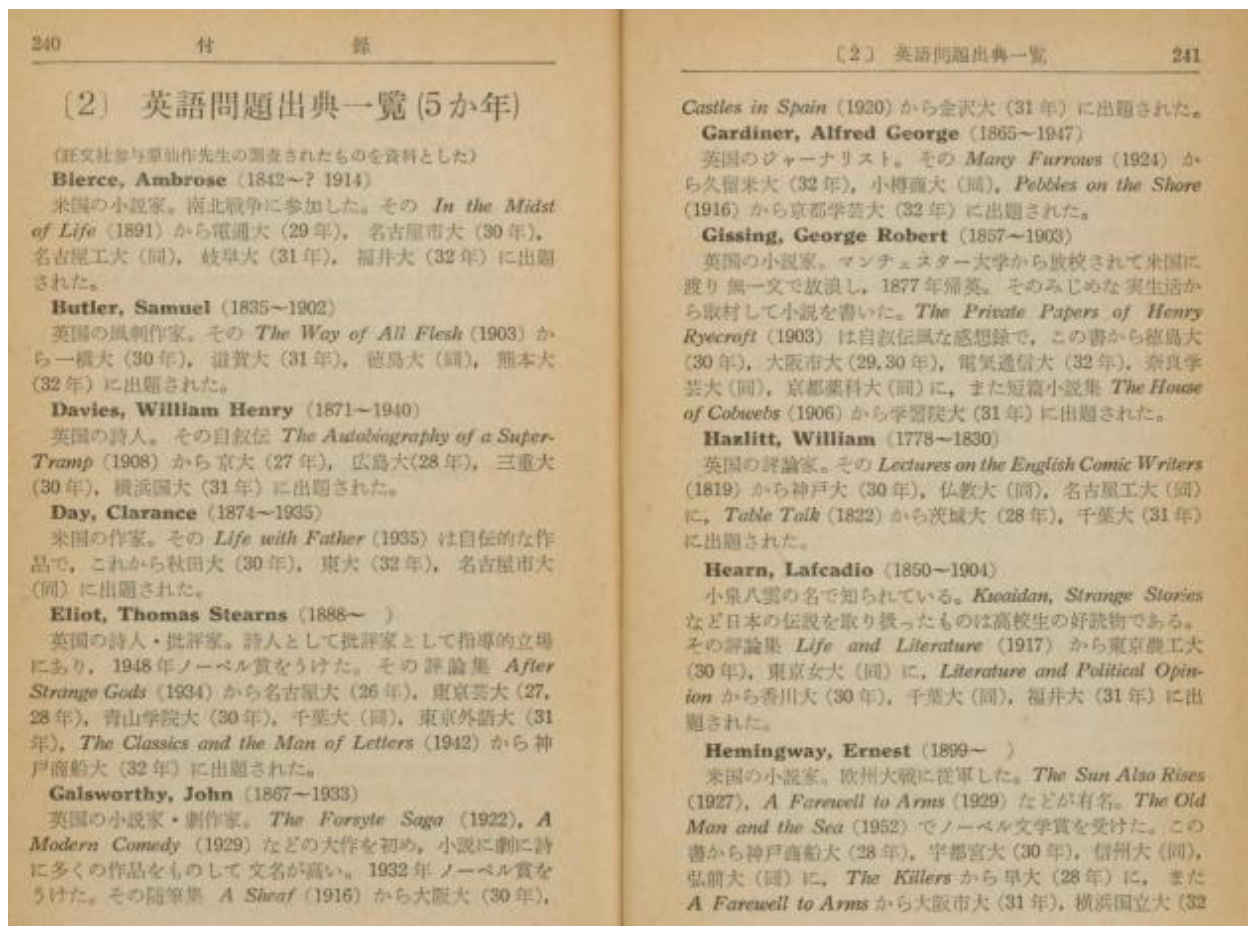
ところで、初期の版にあった「出典解説」とはどのようなものであったか。実際に見ていないので詳細は不明だが、後のものに参考となるものがある。図7に示したのは、かつて1950年代から1960年にかけて発行されていた『入試要点叢書1・英語の要点』（旺文社）の昭和33年版に載った「英語問題出典一覧」の一部で、「旺文社参与原仙作先生の調査されたものを資料とした」とある。これは毎年情報が更新されている。初期の『英文標準問題精講』に付された「出典解説」も類似のものと考えてよからう。

今のようにネット検索できる時代ではないから、入試に使用された文章の出典を探るのは容易ではない。膨大な読書量があつて可能となる。1948（昭和23）年版の「改訂版上梓に際して」には以下の記述がある。

本書の誇りうる特色の一つは全問題の出典を探查して記入したことである。これは著者の二十年にわたる読書の所産であり、又実に本書編纂の苦心の大半を要した点でもある。その結果本書は十六世紀中葉より現代に至る英米の名著約百二十を網羅した散文選集の観を呈するに至った。

まさに「出典研究の第一人者」のなせるわざである。「二十年にわたる読書の所産」とあるが、1948年より20年前といえば、旧制の官立専門学校である長崎高等商業学校に在学中ということになる。その時以来、休まずに英米の書を読み漁ってきたということであろう。

（図7）



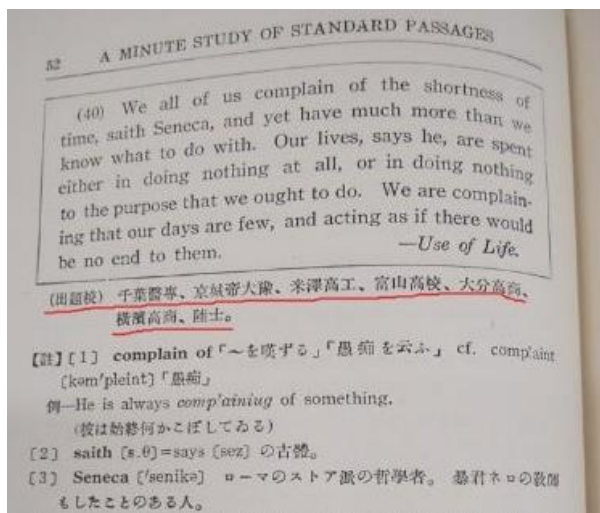
## 5. 『英文標準問題精講』改訂の内容

度重なる『英文標準問題精講』の改訂は主に、(a) 古風な文章の修正と削除、(b) 文法解説の補足、(c) 構文・文体解説の充実、に分類できる。

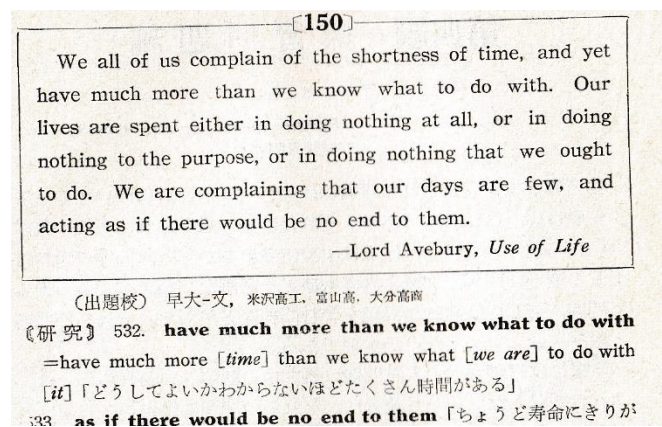
### (a) 古風な文章の修正と削除

『英文標準問題精講』が受験参考書である以上、出題されなくなった文章はどんどん差し替えられてゆく。また、かつては多少古風な表現があっても読まれていたものを、英語教育の実情に合わせて徐々に減らしてゆくこともある。その双方に関わるものとして John Lubbock (=Lord Avebury), *Use of Life* がある。図 8 は 1933 年の初版<sup>18</sup>、そして図 9 は 1954 年版である。二つを見比べると、初版の第 2 行にあった「saith Seneca」が 1954 版では削除されているのが分かる。「saith」は say の三人称単数の古形で、戦前にはこのままの形で出題されていたが、戦後は高校生の学習に合わせて削除されたものである。そして 1962 年版以降はこの文章そのものが削除された。この *Use of Life* は戦前には入試問題として何度も利用されたものであるが、戦後は人気がなくなった。

(図 8)



(図 9)



(図 10)

表 2-6 入試によく出た作家ベスト 10 の変遷

1933 年版	1948 年版	1954 年版	1962 年版	1982・91 年版*
Lee, F. 9	Everett, C. 11	Hearn, L. 12	Russell, B. 15	Russell, B. 14
Smiles, S. 9	Hearn, L. 11	Everett, C. 10	Maugham, S. 12	Huxley, A. 9
Lubbock, J. 8	Smiles, S. 9	Smiles, S. 9	Huxley, A. 10	Maugham, S. 7
Gissing, G. 8	Lubbock, J. 8	Lynd, R. 9	Lynd, R. 8	Lynd, R. 7
Hearn, L. 7	Lynd, R. 8	Lubbock, J. 7	Hearn, L. 5	Hemingway, E. 6
Everett, C. 6	Gardiner, A. 7	Bryce, J. 6	Gardiner, A. 5	Gardiner, A. 5
Stevenson, R. 5	Bryce, J. 6	Stevenson, R. 6	Priestley, J. 4	Hearn, L. 4
Hawthorne, N. 4	Lee, F. 6	Gissing, G. 6	Hemingway, E. 4	Forster, E. 4
Jones, D. 4	Stevenson, R. 6	Maugham, S. 6	Spender, S. 4	Eliot, T. 4
Milne, A. 4	Ruskin, J. 5	Johnson, S. 他 5	Gissing, G. 他 3	Gissing, G. 他 3

\*1974 年の原の死後に中原道喜が補訂した 1982 年版と 91 年版は、各出典の点数が同じ。  
(註) 原仙作『英文標準問題精講』(旺文社)の各版の出典一覧より作成。

<sup>18</sup> 初版の画像は「定禅寺大学 2 年生」というブログの「1933 年が初版の英語参考書」という 2021 年 6 月 14 日の記事から引用。以下参照。

<https://ameblo.jp/pecoenglish/entry-12680540606.html>

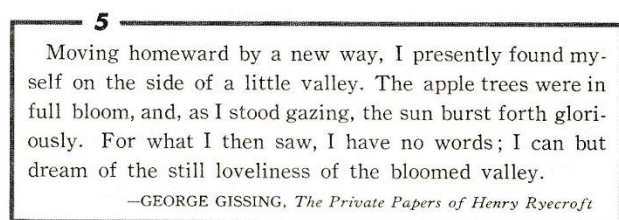


図 10 は『英文標準問題精講』の 1933 年版から 1984 年版までの問題出典表を基にまとめられたもので、入試に引用された作家の各時代の第 1～10 位である。<sup>19</sup> 1933 年に第 3 位であった Lubbock が 1962 年以降は消えている。つまり、上の文章 (図 8、図 9) は古風な表現を含んでいただけでなく、入試問題の出典として人気がなくなったので、『英文標準問題精講』からも姿を消したということである。

## (b) 文法解説の補足

1 例だけを示しておく。図 11 は 1991 年版であるが、「found myself on the side」の解説で、「on the side は目的補語 (Objective Complement) である」と記されている。この記述は 1962 年版以来変わらない。しかし、図 12 の 1954 年版にはこの記述はない。おそらくそれ以前にもなかったであろう。一般に、場所を表す副詞的な前置詞句を補語と見なすかどうかは、研究者によって異なる。原はそれを補語と見なすという立場を 1962 年版において鮮明にしたことになる。これには 1953 年に出た江川泰一郎『英文法解説』の影響があるかも知れない。<sup>20</sup>

(図 11)



研究 ▶17. Moving homeward by a new way=[While I was] moving homeward by a new way 「初めての道をたどって家路に向かっていく」と Moving は時(Time)を表す現在分詞 (Present Participle) である。この構文は Clause にひきのばすことができる。

【例】 Going (=While I was going) downtown I met a friend.

(町に買い物に出かける途中で友だちに会った)

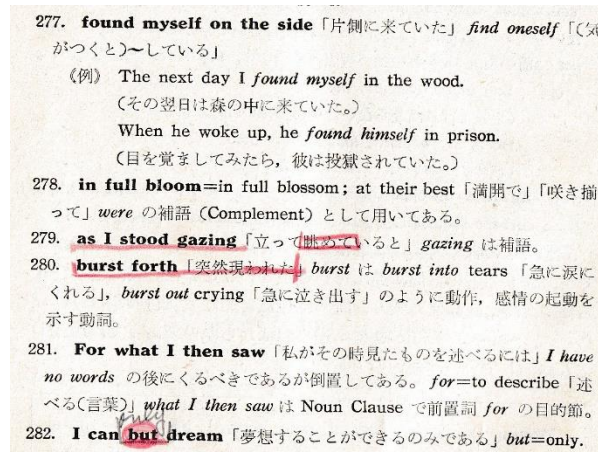
Having finished (=After I had finished) my work I went to bed. (仕事が終わったので私は寝た)

▶18. found myself on the side 「片側に来ていた」 find oneself 「(気がつく) ～している」 on the side は目的補語 (Objective Complement) である。次の例では in prison が目的補語になっている。

【例】 When he woke up, he found himself in prison.

(目を覚ましてみたら、彼は投獄されていた)

(図 12)



## (c) 構文・文体解説の充実

「相関接続詞 (Correlative Conjunction)」や「挿入節 (Embedded Clause)」など、初期にはほとんど解説のなかった構文や文体についての項目は改訂の度に言及する箇所が増えている。それらの中でも特に「描出話法 (Represented Speech)」についての解説は特徴的である。

描出話法 (=自由間接話法) は高校ではおそらく習わないし、受験参考書でも扱わないものが多い。直接話法と間接話法の間間的な形式で、登場人物の心理を臨場感をもって描写する文体である。描出話法についての言及は版を重ねるたびに増えてゆくが、原は特に晩年この描出話法について熱心に研究し、

<sup>19</sup> 図 10 は、江利川春雄 (2008) 『日本人は英語をどう学んできたか』研究社の 78 頁より引用。

<sup>20</sup> cf. 「前置詞句の補語」(中村のブログ「lingua-lingua」の 2025. 6. 4 の記事) 以下参照。

<https://lingua-lingua.seesaa.net/>

論文も書いている。<sup>21</sup> 1971 年版（原自身による改訂としては最終バージョン）では描出話法に関する説明が数か所に出てくるが、特に第Ⅱ編の 71 番の文章については、描出話法の箇所を全て太字で示して全文を再掲するほどの入念さである。原文と訳文を照らし合わせて読むと、描出話法の特徴が実感できる。文学作品を排除した今の受験参考書で、ここまで描出話法に踏み込んだものはない。（図 13 は 1991 年版だが、この部分は 1971 年版と同じ）

（図 13）

71

Dora stopped listening because a dreadful thought had struck her. She ought to give up her seat. She rejected the thought, but it came back. There was no doubt about it. The elderly lady who was standing looked very frail indeed, and it was only proper that Dora, who was young and healthy, should give her seat to the lady who could then sit next to her friend. Dora felt the blood rushing to her face. She sat still and considered the matter. There was no point in being hasty. It was possible of course that while clearly admitting that she ought to give up her seat she might nevertheless simply not do so out of pure selfishness. This would in some ways be a better situation than what would have been the case if it had simply not occurred to her at all that she ought to give up her seat.

—IRIS MURDOCH, *The Bell*

<出題校> 東京芸大-薬理, 大阪外語大

研究

▶309. because a dreadful thought had struck her 「恐ろしい考えが突然頭に浮かんだから」その dreadful thought の内容は第 2 文の内容である。

▶310. She ought to give up her seat. 「わたしが席をゆずるのが当然だ」Dora の意識にのぼった考えを描出した文である。意識の流れを描出した文は *She thought (or said to herself, or told herself) that ~* といった主節+接続詞に依存しないのが特色である。フランスで自由間接文体 (*Style Indirect Libre*) と呼ぶのはそのためである。

▶311. There was no doubt about it. 「わたしが席をゆずらねばならないことは疑いない」これも Dora の考えたことを書いた文である。普通の直接体の文に直せば, *She thought, "There is no doubt about it."* となる。その間接体は *She thought that there was no doubt about it.* である。その太字体の部分を抜き出したものが描出話法 (*Represented Speech*) と呼ばれる用法である。それを文学では意識の流れ手法 (*Stream of Consciousness Technique*) という。全文を客観描写 (*Objective Description*) の部分と主

観描写 (*Subjective Description*) の部分 (太字体) とに区分すれば次のようになる。

Dora stopped listening because a dreadful thought had struck her. She ought to give up her seat. She rejected the thought, but it came back. There was no doubt about it. The elderly lady who was standing looked very frail indeed, and it was only proper that Dora, who was young and healthy, should give her seat to the lady who could then sit next to her friend. Dora felt the blood rushing to her face. She sat still and considered the matter. There was no point in being hasty. It was possible of course that while clearly admitting that she ought to give up her seat she might nevertheless simply not do so out of pure selfishness. This would in some ways be a better situation than what would have been the case if it had simply not occurred to her at all that she ought to give up her seat.

【語句】 Dora [dó:rə] 女性の名まえ。give up one's seat 「席をゆずる」 reject [ridʒɛkt] 「拒否する」 no doubt 「疑いもなく」「確かに」 next to her friend 「知人の隣に」 老婦人の友人が同じ車内に乗り合わせているのである。There was no point in being hasty. 「あわてても何の役にも立たない」 There is not much point in translating this book. (この本を翻訳してもたいて意味がない) admit [admit] 「認める」 out of pure selfishness 「まったく自分勝手に」 in some ways 「いろいろな意味で」

訳文

ドーラは恐ろしい考えが急に頭に浮かんだので、会話を耳を傾けるのをやめた。わたしが席をゆずるのが当然だわ。ドーラはその考えを打ち消したが、ふたたび考えはもどってきた。ゆずらなければならないことはもう疑いの余地がない。立っている老婦人は、ほんとうに弱々しく見えるし、自分は若くて健康なのだから、このご婦人に席をゆずるのはまったく当然だわ、そうすればこのご婦人も知人のお隣にすわれるんだから、と思う。ドーラは顔に血がさっとのぼってくるのを感じた。ドーラは、じつとすわったままでその問題を考え込んだ。あわてても何にもならない。たとえ席をゆずるのが当然だと心にはっきりと認めていても、それでも、まったく自分の勝手から、席をゆずらないことだって、もちろん、わたしにはできるんだから。席をゆずるのが義務だということをわたしが全然考えなかったとした場合よりも、そのほうが、いろいろな意味で、まだましかもしれないわ、と彼女は考えた。

## 6. 主要著作以外の仕事

「2. 原仙作略伝」に主な著作を挙げておいたが、原には単行本として出版されている著作以外にも、雑誌に掲載した記事が大量にある。入試英語の出典調べ、文学作品の訳注、あるいは海外のニュース記事の紹介などについてはすでに触れた。ここでは、それ以外のものをいくつか紹介する。

### (a) 高校生向けの洋書案内

1953 年から 1957 年まで小雑誌『Books of the World』<sup>22</sup>で「高校生の洋書」というコーナーを担当し、

<sup>21</sup> 原仙作 (1972) 「Jane Austen と George Eliot の小説における心理描写の技法」『武蔵野英米文学』5. 150-165 頁。また、原仙作 (1972) 「二葉亭四迷の「浮雲」と意識の流れ手法について」『武蔵野女子大学紀要』7. 75-83 頁。この二つの論文の最後に「本学専任講師」の肩書がある。

<sup>22</sup> この小雑誌は旺文社から発行されていた雑誌『The Youth's Companion』の巻末付録で、1954 年 9 月発行の 3 巻 2 号から東京出版販売 (現トーハン) からの発行になった。これは 1954 年 8 月から洋書の輸入販売業務を旺文社から引き継いだことによる。

主に高校生の質問に答える形で洋書案内を書いている。図 14 は『Books of the World』の 1954 年 5 月号に載ったものである。この中で、ポーの小説を高校 3 年生程度、ドイルのシャーロック・ホームズものを 2 年生程度、そしてアガサ・クリスティーの小説をさらに易しいとするのは、要求するレベルがかなり高いように思える。これが 70 年以上前の時代の水準ということなのかも知れないし、あるいはこの文章の執筆当時、原が進学校である開成高校の教師だったということも関係あるかも知れない。

(図 14)

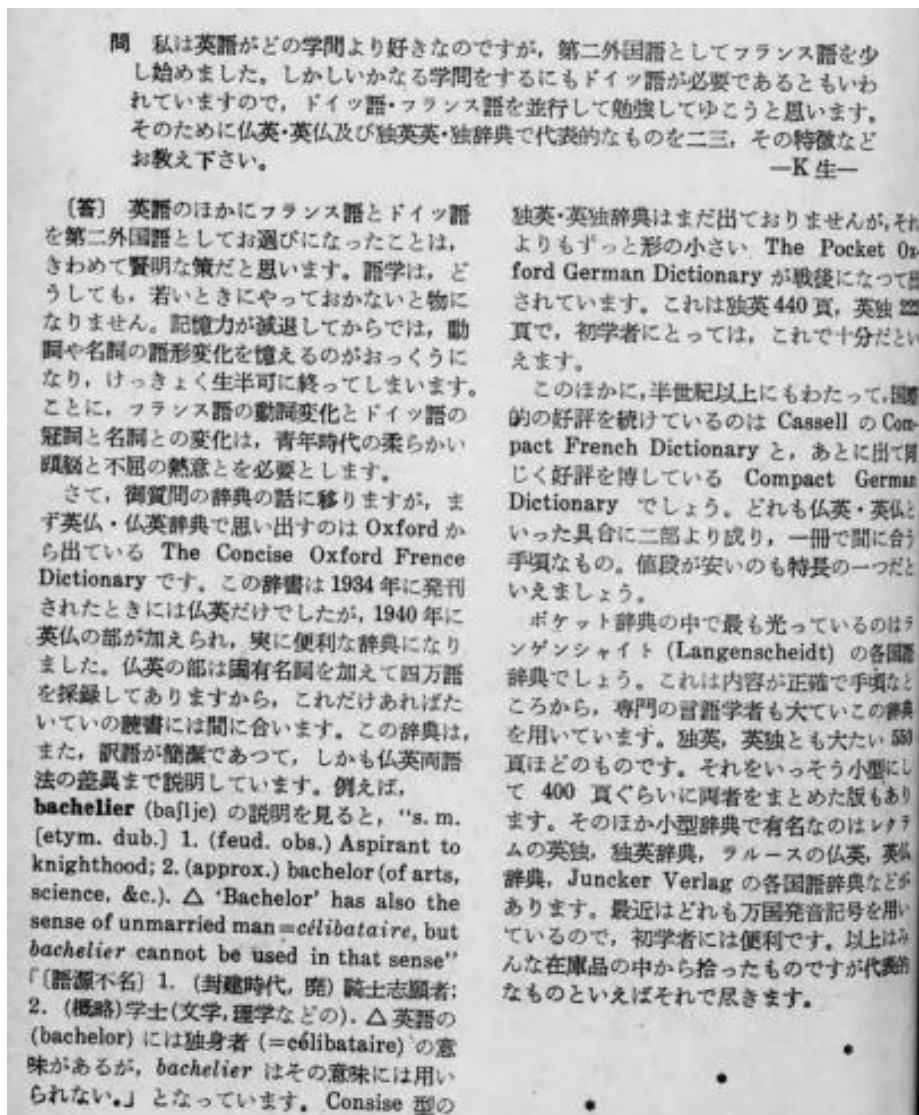


この文章の最後に、アメリカの大リーグ関連の書籍を紹介している。原には『野球英語辞典』（芙蓉出版社、1949）などの著作もあり、アメリカの野球に精通していた。『大学入試対策シリーズ [35 年版] 英文解釈の傾向と対策』（旺文社、1959）の著者紹介に「…アメリカ野球評論家としても有名である。余暇には沖釣りを楽しまれる。」とあるほど、野球好きは有名だったようだ。

図 15 は『Books of the World』の 1956 年 12 月号に載ったもので、英仏・仏英辞書と英独・独英辞書について解説したものである。かなり詳しい紹介であり、フランス語やドイツ語の学習経験があることが分かる。



(図 15)



## (b) 作家と作品の紹介

図 16 は 1955 年 2 月 1 日発行の『The Youth's Companion』に、昭和 30 年度入試の予想問題として哲学者ラッセル (Bertrand Russell) の文章を取り上げたものであるが、冒頭に詳細なラッセルの紹介文がある。その辺の人名辞典に劣らないほどの詳しさである。同様の充実した紹介文を添えた予想問題は、モーム (Somerset Maugham)、リンド (Robert Lynd)、ハックスリー (Aldous Huxley) など多くある。

原は受験英語の学習において、問題文 (原文) の執筆者について知るのは有用なことだと考えていた。『英文標準問題精講』の初版に記された「緒言」は、一部分を削られながらも、現行版の「はしがき」として収められているが、その最後に次のようにある。

なお出典を明示して、入学試験問題の多くは日常誦読される英米文学の主要な典籍より選ばれることを知らしめんことに努めた。巻頭に問題出典表を掲げたのは、英米文学に多少の関心と知識とを持つことが、英語を真に理解するの一助になると信じたからである。

哲学者や科学者のエッセーをも含めた広義の英米文学を読み、英語を深く理解するために、一種の方

便として入試英語対策を若い学習者に教授したのだとも言える。それは英語教師としての仕事と全く矛盾しなかったし、自らの英語研究にも有益なものであった。

(図 16)

30年度入試の出典予想

## Bertrand Russell の評論

原 仙 作

哲学者には由来長命者が多い。フランスの哲学者フントネル (Bernard Fontenelle, 1657—1757) は 100 歳まで生きているし、最近の例では、1952 年に亡くなった 3 人の偉大な哲学者のうち最も若かったイタリアのクローチェ (Benedetto Croce, 1866—1952) が 86 歳、サンタヤーナ (George Santayana, 1863—1952) が 90 歳、アメリカ最大の哲学者デューイ (John Dewey, 1859—1952) は 93 歳であった。これらの先輩に比べると、この 5 月 18 日に満 83 歳を迎えるラッセル伯は年齢的にはやや若いともいえるが、驚くべきことは、彼が少しも精力の衰えを見せていないことである。80 歳を越えた今日でも、現存の世界最大の哲学者として、講演に著述に忙しい生活を送り、苦悩する現在の世界に前途の希望を失った人類に絶えず真実の光を与えて激励することを怠らない。

Bertrand Arthur William Russell は 1872 年 Amberley 子爵の二男として生れた。このとき彼の名付親に立ったのは有名な経済学者 John Stuart Mill であった。Bertrand が 4 歳にもならないうちに両親に死なれたので、彼は祖父の John Russell 伯に育てられた。祖父は自由貿易と自由教育とユダヤ人解放のために戦った偉大な政治家であり、2 回も首相に選ばれた人であった。18 歳まで家庭教師について勉強し、それからケンブリッジ大学にはいって数学と哲学を修めた。

1894 年大学を卒業、外交官になるつもりで

しばらくパリのイギリス大使館に勤めたが、間もなく辞職してドイツに行き政治学を研究し、『ドイツ社会民主主義』(German Social Democracy, 1896) を著した。やがて記号論理学に興味を持ち、イタリアの数学者 Peano の理論を展開させた『数学の原理』(The Principles of Mathematics, 1896) を書き、数学は論理学の一部であるという新説を発表して当時の学界を驚かせた。その続編ともいえる『数学原理』(Principia Mathematica 全 3 巻, 1910—13) は数学的論理学 (mathematic logic) を体系づけた不朽の名著である。これは彼の『西洋哲学史』(A History of Western Philosophy, 1946) とともに、新世界の金字塔と目されている。

哲学以外の問題についても多数の著書論文がある。教育については古典教育を排撃して科学教育を唱道し、結婚については因襲的な道徳観に反対し、政治的分野では思想と行動の自由を主張する。そのうちで有名なのは『幸福の征服』(The Conquest of Happiness, 1930)、『怠惰を讃えて』(In Praise of Idleness, 1935)、『権威と個人』(Authority and Individual, 1948)、『不評な随筆』(Unpopular Essays, 1951)、『科学の社会に与える重圧』(The Impact of Science on Society, 1951)、『変わりゆく世界に対する新たな希望』(New Hopes for a Changing World, 1952)、『郊外の悪魔』(Satan in the Suburbs, 1953)、『悪夢』(Nightmares, 1954) などであるが、

最後の 2 冊は短編小説集で、80 歳を過ぎた老人の作品とは思えぬ若々しさとユーモアを持つ。古雅な文体は 19 世紀の作家 Thomas De Quincey のそれを思わせる。前者は非常に好評を博し 1 年もたたぬうちに 3 版を出した。ラッセルは北京・ガラフォニア・ハーヴァード・シカゴ・ケンブリッジなどの多くの学校に教えた経験がある。彼の自由な言論はだれも知る通りであるが、そのために絶えず問題を起こした。第 1 次大戦中は平和主義的主張のためにケンブリッジ大学の講席を免ぜられ、さらに 6 月 30 日のあいだ投獄された。1940 年にもニューヨークの市立大学の教授に任ぜられたとき、右翼と教会団体から猛烈に抗議され、契約を取消された。このとき彼は『ソクラテスも僕と同じ奔騰をうけた——無神論者であり、青年を堕落させたといつて』と抗議したそうである。

1944 年イギリスに帰り、労働党内閣の出現によって多少のくつろぎを感じたのか、貴族院の自席につくことも時折あった。1949 年には多年にわたる彼の功労が認められて『功勞勲位』が授けられ、1950 年にはノーベル文学賞が贈られた。彼は 1 男 2 女の父であるが、



Bertrand Russell

家庭生活については独自の主張をもち、ほぼ 15 年ごとに離婚している。1952 年には 52 歳になるアメリカの作家 Edith Finch と結婚した。Finch は 4 度目の夫人である。老伯の趣味は将棋と推理小説だといふ。

彼の著書はわが国でも愛読され、入試問題にも 29 年東北大・京都大・鹿児島大、28 年一橋大・広島大、27 年早大文・慶大工・広島大、26 年一橋大・九州大などに出されている。

(1)

There are various ways of attempting to cope with the fear of death. We may try to ignore it; we may never mention it, and always try to turn thoughts in another direction when we find ourselves dwelling on it. Or we may adopt the exactly opposite course, and meditate continually concerning the brevity of human life, in the hope that familiarity will breed contempt. There is a third course, which has been very widely adopted, and that is, to persuade oneself and others that death is not death, but the gateway to a new and better life. The belief that death is a gateway to a better life ought, logically, to prevent men from feeling any fear of death. Fortunately for the medical profession, it does not in fact have this effect, except in a few rare instances. One does not find that believers in a future life are less afraid of illness or more

## 7. まとめ

以上、原仙作と彼の仕事についてのあらましを述べてきた。十代半ばで英語学習に目覚め、以来晩年まで英米の文学作品、哲学者や科学者の随筆、偉人の伝記、あるいはニュース記事や論説など、あらゆる種類の英語を読み続けた。入試英語の既出問題および予想問題についての詳しい解説を毎年のように公表したが、そこには単なる受験対策を超えて、人生の指針となるような文章を若者たちにたくさん読んでもらいたいという彼のあつい思いが読み取れる。

原仙作『英文標準問題精講』は 1933 (昭和 8) 年の初版発行以来、1942 (昭和 17) 年発行の赤尾好夫『英語基本単語熟語集』(赤尾の豆単) とともに旺文社の屋台骨を支え続けた。1971 (昭和 46) 年の時点でも、受験参考書のトップ 5 に両書が入っている。<sup>23</sup> 豆単は今では消えてしまったが、『英文標準問題精講』は残った。それはこの書に収められた数々の文章の中に、理性や感情を刺激するような言葉が多く散

<sup>23</sup> 『週刊朝日』1971 (昭和 46) 年 3 月 5 日号によれば、第 1 位が豆単、第 5 位が『英文標準問題精講』であったという。「希望の英語教育へ (江利川春雄研究室ブログ)」による。以下参照。

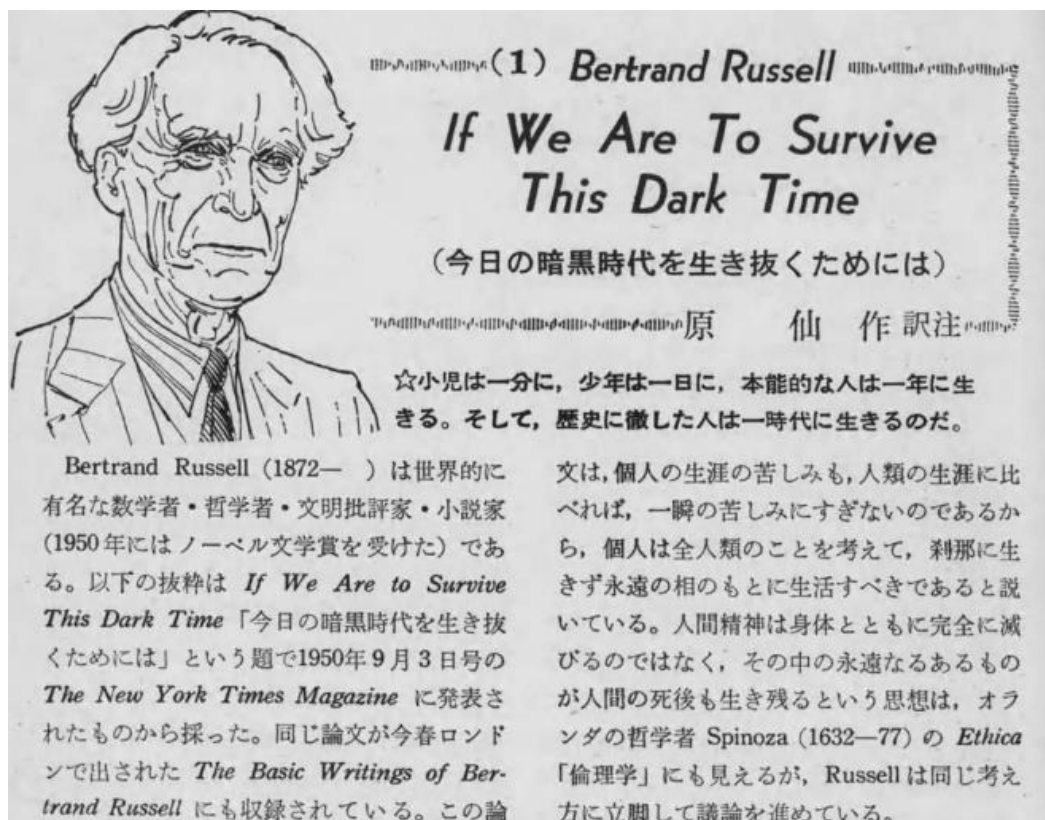
<https://gibsonerich.hatenablog.com/entry/7867661>



りばめられていたからに他ならない。

最後に 1961 年 12 月号の『The Youth's Companion』の、入試対策用（という名目の下に寄せられた）英文読解の冒頭の説明部分を掲げておく。十代の若者に向けて原が選んだ、ラッセルのメッセージである。

(図 17)



(1) Bertrand Russell

**If We Are To Survive  
This Dark Time**

(今日の暗黒時代を生き抜くためには)

原 仙 作 訳注

☆小児は一分に、少年は一日に、本能的な人は一年に生きる。そして、歴史に徹した人は一時代に生きるのだ。

Bertrand Russell (1872— ) は世界的に有名な数学者・哲学者・文明批評家・小説家 (1950 年にはノーベル文学賞を受けた) である。以下の抜粋は *If We Are to Survive This Dark Time* 「今日の暗黒時代を生き抜くためには」という題で 1950 年 9 月 3 日号の *The New York Times Magazine* に発表されたものから採った。同じ論文が今春ロンドンで出された *The Basic Writings of Bertrand Russell* にも収録されている。この論文は、個人の生涯の苦しみも、人類の生涯に比べれば、一瞬の苦しみにすぎないのであるから、個人は全人類のことを考えて、刹那に生きず永遠の相のもとに生活すべきであると説いている。人間精神は身体とともに完全に滅びるのではなく、その中の永遠なるあるものが人間の死後も生き残るという思想は、オランダの哲学者 Spinoza (1632—77) の *Ethica* 「倫理学」にも見えるが、Russell は同じ考え方に立脚して議論を進めている。

#### [追記]

小文脱稿後、原仙作について言及した資料を目にしたので、紹介しておく。『高二時代』1965 年 11 月号 (旺文社) の特集記事「英語征服の短距離コース」(209-215 頁) で、英語のプロたちの英語学習経験のエピソードが記されている。原仙作に関わる部分を抜き書きすると以下の通りである。

----- (以下引用) -----

らくだといえ、原仙作先生にもその経験がある。原先生といえ、**「原仙の英標」**の名で、大学や高校の先生に親しまれているくらい、古くから有名である。今も旺文社から出ているが、毎年ここから三、四校に出題されるというので、受験生に喜ばれている。

そして先生は記憶力にすぐれ、大学の入試問題を一目見れば、「ああこれはラッセルの何という本のどのへんにある。あれはモームの何という本の何々のくだりにある」といったぐあいに思い出される。「出典がわからなかったら原先生に聞け」と言うくらいである。

ところが、この原先生が、むかし英語ができなくて留年したというのだから、驚いてしまう。九州の海星中学二年の時のことだ。

それから先生はまずリーダーを全部丸暗記した。つづいて小野圭次郎の「英文解釈」を三回繰り返し読んでこれも暗記するように覚えてしまった。二年後期にはもちろん英語はトップになり、卒業するまでクラスの級長をつづけた。そして原書を手あたりしだいに読みまくった。中学五年（今の高校二年）のとき、研究社の「上級英語」という雑誌にもの申したのがきっかけで、“入試英語の出典研究”というテーマで原稿を依頼され、三か月連載した。

そして、現在の「英文標準問題精講」の初版を旺文社から出したのは、昭和八年、実に先生二十三歳の八月であった。もう押しも押されもせぬ権威だった。これほどの英語の権威にして、君以上に英語に悩まされたことがあるというのだから、英語ができないといって嘆く必要はない。あきらめるなんて、とんでもないというものである。

-----（引用終わり）-----

最後の部分で「二十三歳の八月」とあるのは誤りで、正しくは「二十四歳」である。また「八月」とあるのは実際に発売された時期かも知れないが、公式の発行日は「9月1日」である。

上の文章で興味を引く点が二つある。一つは、中学二年の時に留年したということである。「2. 原仙作略伝」に記したように、原は中学二年から英語の音読に精を出している。どうやら留年が契機になったようだ。もう一つは、中学五年の時に研究社の雑誌『上級英語』に「もの申した」のがきっかけで原稿を依頼されたということである。自分自身も受験生でありながら、（旧制の）高校や高専の入試英語の出典について研究し、発表するというのは尋常ではない。中学時代の留年をきっかけとして英語に熱中したことが、その後の人生を決定したのである。